

到彼岸に想う

大谷昭仁

「暑さ寒さも彼岸まで」と言われる通り、この時期になると本堂裏に彼岸花が咲き、夏の終わりと秋の始まりを告げます。

お彼岸は日本独自の仏教行事で、実はインドや中国には存在しません。いつ、なぜ日本に根付いたのかは正確にはわかっていませんが、古代にはすでに国家行事として行われ、『源氏物語』など平安時代の文献にも登場することから、当時すでに民間に定着していたことがわかります。

おそろく、四季のはつきりした日本の風土や稲作のサイクル、先祖信仰などが結びついて生まれたのでしょう。

「彼岸」とは文字通り「向こう岸」のこと。今いる場所（此岸）から川や海を渡って、向こう岸（彼岸）へ至る——これ

を本来「到彼岸」といいます。

昔の日本人は、死者は山や海、天や地の下といった「あの世」へ行き、また戻つてくると素朴に信じていました。

この考え方に仏教が結びつき、「あの世」



は次第に「浄土」として理解されるようになります。単なる行き来の世界ではなく、迷いを超えた悟りの世界を目指す——ここに日本人の精神的な目覚めがあつたといえます。

中世には、中国の高僧・善導大師が説い

た「二河白道（にがびやくどう）」の教えが広まりました。荒れ狂う水と燃えさかる火の間に架かる一筋の細い白い道——これは、貪りと怒りに苦しむ人間が、念仏の力によつて彼岸（浄土）へと渡っていく姿を表しています。また、西に沈む太陽を通して極楽浄土を思い描く「日想観」という修行も、彼岸行事に新たな意味を与えました。

亀山本徳寺では、九月二十二日から二十四日までの三日間、お彼岸のお勤めを行います。不安と迷いを抱えて生きる私たちが、仏と向き合うとき、浄土真宗の教えの世界が開かれます。

どうぞお誘い合わせのうえ、ご参集ください。

秋彼岸讃仏会の日程

九月二十二日・二十三日・二十四日

午前七時半

晨朝 勤行 引き続き聴聞

午前十時

門信徒 勤行 引き続き聴聞

午後一時

讃仏会 勤行 引き続き聴聞

布教使

太平寺 深水健司師

依所

亀山本徳寺本堂

姫路市亀山三三四・電話二三五・〇二四二

山陽電車「亀山駅」下車東スグ